平成２４年度　西宮文学案内
春期講座 第３回「朗読で聴く西宮」
西宮を行き交う人々

日時：2012 年 7 月 29 日（日）14 時から
場所：甲南大学西宮キャンパス（甲南ＣＵＢＥ）
講師：河内　厚郎氏（文化プロデューサー）
朗読：定藤　博子氏

河内　まず最初は、湯川秀樹の『旅人』という前半生を振り返ったエッセイです。湯川さんは中間子理論でノーベル賞をとられましたけど、あの研究をなさったのは西宮時代です。苦楽園に７年、そのあと甲子園口にも住まれました。ほとんどその時代の業績なんです。一生まんべんなく成果あげられる学者はいないわけで、後半生は平和運動とかが主でした。西宮在住時代の大阪大学に勤めた時代が、研究者としての中心的な時代でした。ご本人もその時代を振り返るのが一番懐かしいらしく、奥さんの湯川スミさんの出されたエッセイは『苦楽の園』という名前がつけられています。苦楽園時代がもっとも思い出深いのでしょう。のちに京都大学を退官される日の記者会見でも、一番思い出深いのは苦楽園時代だとおっしゃっています。

では、定藤さんに朗読してもらいます。

（朗読　『旅人』湯川秀樹）

河内　ちょうど中間子理論を思いつかれたころのことが綴られた有名なエッセイでした。湯川博士は大阪にある湯川胃腸病院の養子で、大阪市内に住んでおられたんですけど、気候のよいところに移るということで、養父にすすめられて苦楽園に移ってきました。その苦楽園時代に大事な着想が浮かんだ。奥さんのスミさんがノーベル賞のことを気にしていたそうで、「早く論文を書くように」と急き立てたそうです。

次に小説に移ります。遠藤周作の『黄色い人』です。大戦下、教会を破門になった神父と、彼を見つめる日本人青年の話です。阪神大水害の頃が物語の突端になっていまして、その時に家族を失った女性に神父が同情して、憐憫がいつのまにか情欲に代わり、女性と肉体関係を持ってしまって教会を破門されるという、破戒僧みたいな神父です。それと、モラルがなく友人の女性と肉体関係を持ってしまう日本人青年の話。二人を中心に、神と罪の問題、日本人がどんなふうにキリスト教を理解してきたかを理解させる文学だと思います。デュラン神父の心を想像しながら聞いていただきます。

（朗読　『黄色い人』遠藤周作）

河内　お聞きのように重い内容の文学ですが、関西学院の北のほう、仁川あたりの風景が描かれています。阪急の今津線の風景が出てくるので選びました。

遠藤さんの出身は旧満州ですが、日本に引き揚げられて、お母さんの遠藤郁子さんは小林聖心の音楽の先生でした。教え子には、ホトトギスを出してこられた稲畑汀子さんという俳人や女流文学賞を取られた須賀敦子さんがいます。

遠藤さんは灘中から慶応大学へ行かれ進み、フランスのリヨンに留学された。向こうに行って、日本人がこれまで漠然と考えていたキリスト教と向こうで見たものはあまりにも違う。拷問の跡などいっぱいありますので、癒しの宗教なんかではないとすぐ分かる。クリスチャンになった日本人の、キリスト教の重圧との葛藤を描いたのが遠藤さんの文学です。日本に来て罪を犯した神父の話や、江戸時代でしたら踏み絵を踏んでしまったクリスチャンの話とか、そういうような文学が多い。遠藤さんは本質はまじめな人だったと言われていまして、だから逆にユーモラスなＣＭに出たりとかしましたので、どっちが本当の遠藤周作だとよく問われました。『黄色い人』は、黄色人種がキリスト教を理解できるかどうかという問題提起であり、連作の『白い人』は白人のことです。

次は宮本輝さんの『錦繍』です。運命的な事件ゆえに、愛しながらも離婚した二人。夫が若い時に好きだった女性にたまたま出会って無理心中してしまう。それで夫婦は
別れることになったのですが、１０年ぶりに雪の蔵王で再会して、以来、二人が手紙をやりとりするという往復書簡の話です。男は大阪の下町で新しい女性と暮らしているわけですが、妻のほうは再婚して障害者の子供を育てている。往復書簡によって二人の孤独が少しずつ癒されていき、新しい人生に向かっていくという話です。

その女性が住んでいる場所が香櫨園という設定になっています。この女性がモーツァルトという喫茶店に行って音楽を聴くシーンは人気があり、宮本ファンはモーツァルトという名の喫茶店を探しにくるそうですが、見つからない。甲陽中学のあたりの設定で、誰か店を出したらいいと思うんですが。しっとりした物語で、宮本さんが胸を患われて苦しい思いをしたときに書かれたものなので、何度も映画化の話が出ていますが、なかなか実現しない。舞台化はされました。梅田のドラマシティでもやっていましたけど、登場人物が少なく、ドラマに仕立てても華やかな話にはならないでしょう。二人芝居とか朗読劇に向いているものですけど、宮本さんの作品の中でも評価の高い人気作品です。

勝沼亜紀というヒロインが、夫と別れてから１０年が経ち、思いを綴った一節を読んでいただきます。

（朗読　宮本輝『錦繍』）

河内　関西弁と標準語を巧みに語り分けていただきました。定藤さんが関西人だということがよく分かりました(笑)。

香櫨園のあたりは、最近ちょっと減りましたけど戦前からテニスコートが多くあった地域です。毎日杯とか大きなテニスの大会もありました。あの風景に喫茶店が溶け込んでいる。宮本さんは夙川にお住みになりたかったそうで、『泥の河』で芥川賞を取られてから夙川に家を求めようと探していたら、伊丹市長が「土地を提供するから住み続けてほしい」と言ったとか。現在も伊丹にお住まいです。夙川というのは住みたいだけでなく文学の素材にしてみたいと思わせるところのようです。

次に聞いていただく井上靖も、小説の出だしをどうしても現在オアシスロードと呼ばれている阪神香櫨園と海岸との間の遊歩道にしてしまう癖がありますと、本人が述懐されていました。なんとなくそういう気分にさせる風景じゃなかろうか。『卍』もこのあたりですね。井上靖は毎日新聞の記者をしていた頃、川西町か川添町に住んだ時代があり、土地勘があるんだと思います。現在の図書館のあたりですね。

宮本さんは産経の広告会社に勤めておられたのですが、神経衰弱になられて塚口駅から梅田まで電車に乗れなくなった。ついに家を出られなくなってしまって、やむをえず懸賞小説を書いた。それが『優駿』という競馬の小説です。そこから作家になられて、『ドナウの旅人』で有名になり、『泥の河』『道頓堀川』『蛍川』の川シリーズのあと芥川賞を取られ、それから身体を悪くされ、再生してきたときの物語が『錦繍』となります。阪神間と日本海側の風景が交互に出てくるような小説がわりと多い。

余談ですが、この小説には香櫨園が魅力的な閑静な住宅街で描かれているのですが、駅前にラブホテルがあると書かれていまして、さすがによく描いているなと、今もそのホテルはありますからね。モーツァルトを好きな人にはこたえられない小説で、山小屋風の別荘のような喫茶店という設定です。今も大谷美術館のあたりにはそのような雰囲気の店がありますね。

続きまして『猟銃』ですが、井上靖の初期の代表作で、今回、定藤さんに朗読してもらうに当たり、あらためて読み返してみたのですが、本当によくできています。井上靖は若い頃から文才があったのですが、小説を書くのを封じて毎日新聞に入社し、４０歳くらいで、終戦後に再出発した作品が『猟銃』『闘牛』『あした来る人』とか、１０年間くらい阪神間を舞台にした小説を書き続けました。有名になってから東京へ移り、歴史小説の『天平の甍』や『風林火山』を書きますが、阪神間時代は現代小説が中心で、『猟銃』は代表的です。

解説をみていただきますと、三杉穣介という、孤独を抱えて生きている人物を中心に、奥さんのみどりとは冷え切った関係で、深い関係を持っている彩子、その娘の薔子が大人たちの世界を想像しているという設定です。映画になり、三杉を佐分利信が、奥さんを岡田茉莉子がやりました。彩子はを山本富士子。

井上靖の文学にはセレブが出てきます。それも雲の上のセレブではなく、かすかに手が届きそうなセレブが出てくるので、よく売れるのですね。憧れを抱かせるような世界をリリシズム豊かに描く。テーマは必ずしも恋愛ではなく、男の孤独、虚無感がテーマなので

すが、描かれてる世界に甘美なところがあるので、読ませる、聞かせるというものです。

（朗読　井上靖　『猟銃』）

河内　なかなか重い状況で、つまり三杉穣介と不倫をしている彩子が毒を飲んだ。穣介の奥さんのみどりは、はるか昔から実は不倫を知っていた。女性同士は、いとこで仲がいいんですね。みどりは本当は鋭い女性なのに、あたかも気がつかないようにふるまって生きてきた。最後に彩子を看取ったのはみどりなのですが、それを子供の側
から見た風景として描くという怖い設定にしています。娘の通う学校というのは小林聖心じゃないかという気がします。戦前の小林聖心は西宮北口から毎日特別電車が出ていました。乗り遅れると関学の学生に声をかけられてしまう。芦屋に住んでいて小林聖心に通う途中で夙川駅を通っていく、そのあたりの情景です。

フランスのパリにポンピドゥー・センターという現代芸術の拠点があり、フランス人が選んだ海外の名作をフランス語で朗読したテープを作っています。日本文学で最初に選ばれたのが『猟銃』なんです。朗読用ですから語りものがいいということで選ばれたのかもしれませんが、他にどんな小説家が選ばれているかというと、谷崎潤一郎、安部公房、遠藤周作などが選ばれていますが、『猟銃』が一番早かった。テレビドラマにも、ラジオの朗読劇にもなりました。最近カナダのほうで、中谷美紀さんが女性三役を演じて話題になっています。

語り手である「私」が、狩猟関係の雑誌に詩を創作して送ったところ掲載されたという形式を取っています。「伊豆の天城山脈ですれ違った１人の中年男性。猟銃を担いでいる男性の背中があまりに孤独で寂しそうだ。それが印象に残った」という詩です。それを投稿したら掲載されてから、一通の手紙が私の下へ届く。「それはおそらく私です」とある。それが三杉穣介だという凝った構成ですね。つまり自分の孤独を見破られたというわけです。付き合っていた女性は毒を飲み、妻は去っていき、そのあとの男性の姿がそう見えたということになっています。井上靖は新聞記者出身で、エンターテイメントの要素もありますね。

次は谷崎潤一郎の『卍』です。さきほど定藤さんが披露された関西弁をまたふんだんに披露していただきます。これは谷崎潤一郎が大正の終わりに関東大震災のため関西へ移ってまいりまして、食べ物と気候が気に入り景色も気に入ったのですが、人間が気に入らない。阪急電車はハイグレードな人が乗っているはずなのに、人が買ってきた荷物の中を見て「これはいくらしましたか」と訊くとか、人が読んでいる新聞を「読み終わったらくれませんか」。そういうのは東京では考えられない、どうも関西は食い物ほど人間は上等じゃないと最初は辛口だったのが、昭和に入るとガラッと変わってきまして、すべて関西はいいとなってくる。そのころ書かれた小説です。最初は食べ物が気に入って、次に女性が気に入って、次に女性の言葉遣いが好きになる。地唄を習い始めて関西の邦楽も好きになっ

てくると、東京の長唄には飽きてくる。大阪の地唄のほうが深みがあると言いだす。東京の女はあやがないということを言い出すわけですね。議論するのは東京の女がいいが、寝物語は大阪の女のほうがいいと、勝手なことを言いだしたころの小説です。

関西弁の小説を書いてみたいと思って取り組みましたが、本人は生粋の江戸っ子ですから関西弁が使えないので、大阪の清水谷高女の、国語の成績がよい学生を家庭教師に呼んで、自分が標準語で書いたものを関西弁に直してもらう。したがって、文章そのものが主役のような小説です。小林秀雄という評論家は、「生き物のような小説だ。言葉が独りでに動き出している」とか言っています。

内容は、香櫨園の海岸に住んでいる柿内園子という人妻が大阪の画塾に通っているのですが、一緒に習っている徳光光子という女性があまりに美しいものですから、仏像の絵を描いていても、その仏像の半ヌードの絵が光子の顔に似てくるので、ほかの生徒たちにからかわれる。それで憤慨していたんですが、本当に好きになってしまうという話です。相手の女性には付き合っている男性がいるのですが、その後いろんなことがありまして、園子は死を思いつめる。最後は自分の夫と相手の女性ができてしまうという、どんでん返しのどんでん返し。

映画では若尾文子と岸田今日子でやりました。テレビでも何度かやっています。高田美和さんと三浦真弓でもやりましたし、たしか樋口可南子さんもやっています。映像になると視覚的に刺激的なものになりますが、原作はあくまで小説ですので、言葉の力というか、特に昭和初期の阪神言葉といわれている――伝統的な関西弁に少し標準語のボキャブラリーを入れて、ちょっとモダンになった言葉――阪神間の関西弁を使っています。言葉の記録としても貴重なものです。谷崎が住んでいましたのも大阪市内ではなく阪神間でしたから、その言葉を残してみたいと思ったけれども、自分では使えなかったので家庭教師を雇ったわけです。もちろん関西弁ですから、聞いていてお分かりになると思いますが、なにせ８０年前の言葉ですので、ちょっと今とは違う感じがあります。「ん」の入れ方に独特な感じがあります。「なかったのんですけど」とか谷崎の耳には珍しく響いたんでしょうね。

香櫨園の景色が出てきますし、サンルームみたいなところで繰り広げる会話という形になっています。モデルとなった家は今はありませんが、阪急岡本に谷崎潤一郎が自分で設計した家がありまして、そこの窓の格子が「卍」なんです。偶然ではないと思います。それがヒントでこの題になったのか、逆なのか、分かりませんけれど。その家には隠し階段や雪見障子もあったりする、独特な家の造りです。その後、コスモ証券の社長さんの家になりまして、のちにアメリカ人が住んでいたこともあったのですが、震災でつぶれてしまい再建運動がはかどりそうではかどっていません。その家で書かれた「卍」という、昭和初期の名作を聞いていただきます。

（朗読　谷崎潤一郎『卍』）

河内　不思議な小説ですけれど、徳光光子という友人の女性と自分の夫が死んでしまって、未亡人になった後の述懐という設定です。原作を読んでいただくのが一番いい。長い小説ではありませんので、読んでいただけたらと思います。『卍』はたいへん評価の高い小説ですけれども、谷崎はこれで関西弁で小説を書くことに自信が出来たのか、のちに『細雪』を書くことになります。谷崎自身は東京人ですので、ある意味で関西は外国みたいなもので、関西弁にしてもカタカナを使って書いたりする。母音を伸ばすのが面白いと思ったのか、「エ」や「イ」をわざわざ表記したりしています。そういう関西弁の記録としても貴重なものであると思います。

舞台になったのは、香櫨園の夙川の河口のところの東側、昔の海水浴場側ですね。回生病院の反対側に古いお屋敷が残っていたのですが、マンションになったと思います。十何年前に「卍」の家がなくなりそうだと騒がれたんですけれど、なかなか維持するのは難しいものです。「卍」の文学碑を建てようという話もあったのですが、実現していません。

定藤さんにお聴きしますが、どれが一番朗読が難しかったですか？

定藤　やはり『卍』が一番、朗読が難しかったです。

河内　関西弁ということで？

定藤　はい。自分ではこうかなと思っても、人に聞いてもらうと違うとかいろんなことを言われたので。

河内　おかしくなかったですけれどね。最近、関西に育っても関西弁を使わない若い人が出てきていますから。

読んでいて感慨深い作品はありますか？

定藤　読んでいていい作品だなと思ったのは『猟銃』です。

河内　どういうふうに？

定藤　登場人物の感情と言葉というのが、すごくシンクロしていまして、声に出して読むと文章のリズムというものと登場人物の感情の高まりみたいなものが一緒になって感じられて、どんどん読んでしまう作品でした。

河内　原作の言葉がわりあい音楽的になっているということですか？

定藤　すごくリズム感がいいと思います。

河内　井上靖は読みやすく人気の高い作家です。庶民的な世界ではないのですが、入りやすいんですね。一つ一つ感想をお聞きしますが、まず湯川秀樹のはいかがですか？

定藤　科学者らしい簡素な文体なんですけれど、その中でも、家族に対する思いとか、グリム童話を思い出したみたいな博士の人となりを感じられて、博士ってどんな人だったのかなと考えてしまう文章でした。

河内　廃墟になっている苦楽園のホテルも面白い描写で、この時点ですでに過去に栄えたとあります。明治の終わりころにできたリゾート地なんですね。湯川博士の家は今も一部残っています。新聞に紹介されていましたが、博士が使った黒板も保存されているそうです。

次の『錦繍』　はいかがでしたか？

定藤　これも難しい作品だったんですけれど、喫茶店のご主人が近くにいる方に似てらしたので、イメージしながら読みました。

河内　それから、遠藤さんの『黄色い人』は、定藤さんも通われた関西学院の近くの風景ですよね。

定藤　そうですね。仁川橋とかあの辺りはよく歩いたことがあるのですが。

河内　「甲山から吹きおろす氷のような風が」と、非常に寒いところみたいな感じに書かれています。

定藤　そうですね。冬は寒いですけど、甲山から仁川まで何もなく見えるので、風が吹くとまさしく甲山から吹きおろすという表現がぴったりくると思いました。

河内　戦争中フランスは敵国となりました。夙川カトリック教会はフランス系のカトリック教会なので、そこの神父さんも拷問を受けたりといった深刻な歴史があるわけです。

５つ読んでいただきまして、西宮を舞台にした文学についての感想がありますか？

定藤　全体を通してみると、不倫であったりとか、宗教に反することであったりとか、社会的な正義や通念と対峙したときに人間がどういう風に行動するのか、どういう風に考えるのか、人間の本質を垣間見ることができるんじゃないかなと思います。

河内　意識的に選んだわけではないのですが、書簡体や日記体が多いと思います。ちょっと似ているのは平安朝の女流文学です。書簡体や日記体で、プライベートな世界を描いていますよね。大正から昭和にかけての数十年間、阪神間に平安朝の女流文学みたいなプライベートな文学の伝統ができた。これは面白いことじゃないかなと思います。

村上春樹さんも、団塊の世代の作家にしてはプライベートな味わいを大事にしています。大上段に公の問題を出してこないという作家です。阪神間出身者らしいというか。私生活の中からいろんなテーマを手繰り寄せていく風土じゃないかなと私は想像しているんです。

また続編もやっていきたいなと思います。定藤さんは来月ドイツへ行かれるそうですが、どちらですか？

定藤　アウクスブルクです。

河内　それはプロテスタントですか？

定藤　カトリックです

河内　そうですね、アウグストゥスという、ローマ皇帝の名から取っているわけですから、ドイツの南の方ですよね。確か姉妹都市が尼崎ですよね

定藤　ショッピングセンターとかには、あまがさき通りみたいな名前がついていました。

河内　向こうのオペラハウスとアルカイックホールが姉妹協定を結んでいます。

教会はたくさんあるでしょうね。

定藤　たくさんあります。ドイツの教会は黒い塔が多く、戦っている瞬間を書いたのが多いです。天使と悪魔が今まさに戦っているところを描いています。フランスなんかは戦ったあとに天使が悪魔を押さえつけているのが多いんですが、ドイツはまさに殺そうとして

いる。私が思うのは、自然環境を比べると、フランスは温暖ですが。ドイツは厳しいので、戦っているというのがドイツ民にはぴったり来たのではないのかと思いました。

河内　１７世紀の３０年戦争で人口の半分以上は死んでしまっています。日本はあまりそういうことないので･･･。ドイツよりフランスの方が恵まれているわけですよね。

定藤　そうですね。基本的にはゆたかな国ですかね

河内　今何語がしゃべれるんですか？

定藤　フランス語と英語です。

河内　フランスへ留学されていたそうですが、遠藤周作の描いているようなカトリックの世界は理解できますか？

定藤　そうですね。今のフランスは宗教がどうのとかいったりしませんので。ポーランドに行ったんですが、懺悔室に人がたくさん並んでいました。またアウシュビッツに行く機会がありまして、やはり宗教というものが日本人には理解できない激しさといますか、そういうものを持ってとらえられているということが分かりました。

河内　ホーランドは東ヨーロッパですけどカトリックですよね

定藤　そうです。

河内　日本人にはなかなか宗教の問題は分かりにくいですよね。ミュージカルの『屋根の上のヴァイオリン弾き』は日本でも当たるんですが、森繁久弥さんのテヴィエは人情劇になってしまう。本当はユダヤの問題や宗教の問題とかいろいろテーマに含まれているそうですが、日本は宗教的に寛容な国で有難いですけどね。逆にいうと、社会が崩れ始めると戒律がないので行くところまでいってしまうという、怖いような気もします。

　西宮の文学、阪神間の文芸にこれからも先目していきたいと思います。